「体験学習」と自己理解

――学生から教師という立場になって思ったこと――

寺 西 佐稚代（南山短期大学非常勤講師）

1．はじめに

「生涯学習」というテーマを与えられたのだが、筆者は教師という立場に立ってまだ1年しか経っていないので、正直いって生涯学習については今のところ何も書くことができない。そのうえ、毎回の授業に精一杯で、何やらわけのわからぬまま、本当にあっというまに時間が過ぎてしまったのである。“学生にとって必要なことは何だろう？”“授業でやっていることは、学生にとってどのような意味があるのだろう？”“教師の立場から学生に何を伝えたいのだろう？”という疑問に答が出ぬままに1年が過ぎてしまったのである。その問いかけは、私が体験した2年間の人間関係科の教育が、私自身にどのような意味があったのかを探る作業でもあるのかもしれないと思うのである。

筆者は南山短期大学人間関係科で「体験学習」を主とした教育を受け、そして卒業後社会人を経て、四年生大学でいわゆる普通の大学教育を受けた。普通の大学教育を受けてみて、それと比較することによって、改めて人間関係科の教育のユニークな点や欠けている点が見えてきたような気がする。

そこで、人間関係科の卒業生として、また人間関係科の非常勤講師として、人間関係科の教育、主に「体験学習」することの意味について、自己理解を深めるという点から考えてみたいと思う。

2．「体験学習」から学ぶもの

体験学習は“学び方を学ぶ学習である”（Learning How to Learn ）。例えていうならば“他人の釣った魚千匹与えるよりも、自分で一匹の魚を釣る”その釣り方を身につけることである。（体験学習についての詳しい資料は「人

間関係」第2・3号合併号と第4号を参照)

体験学習は、学習者自身が一匹の魚を釣り、釣り方を身につけていくのである。釣る魚もまた、その釣り方もひとりひとり異なるのである。学習の中で、他者との関係を含めた自分の在り方を探ってゆく主体である“私”が、いつもどうであるかを問い、自分自身の在り方を大きくクローズアップすることになる。

また、体験学習では、自分の中で起きていること――感じたこと・思ったこと・感情など――やグループの中で起きていることに気づく練習をもする。それは意識化の練習でもあり、経験を体験に深める練習でもあると思われる。

私達は一日24時間生きている。日常生活の中で様々な経験をするが、あまり意識しないで過ぎてしまうことが多い。自分の中に怒りや悲しみ、喜びが生じてもそれを抑圧してしまう人が多い。経験した出来事や感情を自分にとって意味あることと感じられて、初めて真の体験となるのではないだろうか。そのようなことを自分の成長の糧としていくためには、経験した出来事や内的に体験したことを意識化していくことは大切なことであると思われる。もちろん無意識の力のほうが大きいのだけれど。

3．青年期と「体験学習」

18、19歳という年令である学生は、青年期といわれる発達段階にいる。河合隼雄氏（参・1983）は、青年期を子どもが大人になる中間期間と位置づけ、現代社会においてはそれは大変な作業であると述べている。そして、大人になるということは「モデルの無いところで自分なりの生き方を探してゆくその過程そのもの」であると述べている。青年期の大変さのひとつに、これまで作り上げてきた自分と向き合い、新しい自分を作っていくという作業があると思われる。これまでの自分というものは、親や家庭の影響を強く受けてきたが、そのことはあまり意識されないできた。しかし、これからの自分は自分自身で作っていくという側面が強く、それまでより意識化されて行なわれると言えるだろう。そのような時期に、自分自身の在り方を抜きにしては学習が進まない「体験学習」、また意識化の練習をするという側面がある「体験学習」を経験することは、大きな意味があるように思われる。

河合氏（参・1983）は「今までに建てたひとつの家を壊して新しい家を建てかえる」と青年期を例えている。家を壊している人、新しい家を建てている人、家を壊しながら建てている人、まだそれらのことが訪れていない人、学生ひとりひとり違う。またそれらの作業のやり方も、ひとりひとり違うようである。毎回の授業の終わりにその日の授業をふりかえって気づいたことを学生に書いてもらう。それらを読んだり、学生と話をしていると、学生たちは今までの自分の総決算である“いまここでの自分”に一つ一つ気づき点検をしているよ

うである。今のまま大切にしたいことと変えたいこと、自分にとって必要なことと必要のないことを分けているようである。“自己受容”といわれる自分自身を受け入れることはとても大変なことである。“自分を受け入れる”、“自分らしく生きる”、ということはどういうことなのか、初めて自分に問いかける人も多い。

4．教師という仕事

大学教育の多くは先生が講義をして学生は聞くというものである。それは、学ぶものが興味や関心の世界を広げ、自分の世界を広げるきっかけにもなるだろうが、どうしても学ぶものは受け身になりがちであり、授業も一方通行になりがちである。専門分野の勉強をする場合は、講義だけでもそれが自分のこととして聞けるものである。しかし、多くの講義が退屈なこともまた事実であり、学生の学ぶ意欲がないのも現実である。現在の大学教育はこのふたつが互いに悪影響を及ぼしているように思われる。

学生の状況にあまり関係なく講義は進んでいく。学問の伝達というものはそのようなものかと思う反面、今の学生の現実の姿を無視している面があるとも思える。本を読めばわかるようなだけの講義は面白みに欠けるが、その先生の本当の声を聞くことができた講義は今でも印象に残っている。先生から伝わってくるものが明らかに違うのである。それを学生たちは感覚的に感じているようである。

教育という文字は、“教える”という文字と“育てる”という文字からなっている。前述した普通の大学教育は、教えるということに重点を置いているが、「体験学習」は育てるということに重点を置いているといえる。教師は、学生に一方的に与えるのではなく、学生の反応、特に感情面の反応を捉え、それを学生にとってプラスになるように引き出すことが必要になってくる。これはかなりの熟練を要することである。

また、“育てる”ということは“見守る”ということでもある。これは根気のいることで、本当に相手の成長を信じていなければ出来ない事である。この点は心理療法に似ている点である。

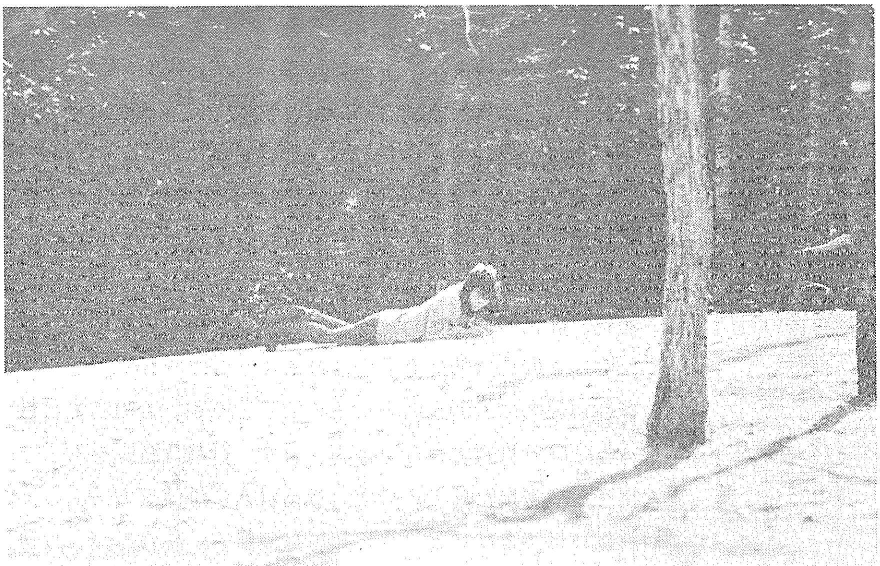
5．おわりに

人間関係科の卒業生が、「体験学習」で学んだものを社会でどのように生かしているのか本当の所よくわからない。長い人生の中のたった2年間の教育が果たしてどれだけ影響するのだろうかとも思う。子どもと大人の中間期間に青年期があるように、日本的な学校教育と日本的な社会の中間期間に人間関係科があるように思う。入学以前の自分と大きく変わったわけではないけれど、ど

こかが少し（質的に）変わった、そのような感覚を持つことができるだけでもいいのかもしれない。自分自身に対する問いかけは、卒業までに答が出るものではない。「体験学習」で学んだ各自の学び方は、自分で自分を育てる力に通じるものでもある。それをどれだけしっかり抱いて生きていけるかは、その人次第のように思う。

生涯学習について考えると、青年期の学習と中年期・老年期の学習とは質的に異なってくるだろうと筆者は推測する。内容においても提供する側の意識のレベルにおいても“深さ”というものがより一層必要になってくるのではないだろうか。

どのように生きるかということは、どのように死ぬかということと表裏一体である。それらの点からも、超越的存在――神と呼ぶのかもしれない――や身体・生命論からのアプローチもよりいっそう必要なのではないだろうかと思う。

参考文献

河合隼雄　1983　大人になることのむずかしさ　岩波書店
河合隼雄　1985　人間関係の教育　人間関係　第2・3号合併号　南山短期大学人間関係研究センター
野瀬寛顕　1968　学び方の教育　黎明書房
星野欣生　1986　体験学習　人間関係　第4号　南山短期大学人間関係研究センター